

■■メールマガジン「静岡県防災」第60号■■

～ 高齢化と災害ボランティア ～

「ボランティア元年」と呼ばれた阪神・淡路大震災から30年を迎えました。

未だに、高速道路の橋脚が倒壊する様子や火災などのショッキングな映像が思い起こされます。

また、能登半島地震からは1年が経過し、本県からも、「静岡県ボランティア協会」が穴水町に、「はままつ n a n e t」が珠洲市の支援を継続する等、様々な団体や個人が能登半島で活動しています。

ボランティアの多寡が災害の度に議論になりますが、日本の高齢化率（65歳以上の人口）は阪神・淡路大震災の1995年時点で14.6%です。2023年は29.1%と倍近くになっています。

昨年、支援に入った、穴水町の自主避難所でも、被災されたお年寄りが、「2007年の地震の時は70代で元気だったんだけどね～」と話をしていました。

本県で、実施している「ふじのくにジュニア防災士」を受講した子ども達のレポートで多いのは、家庭内の防災対策の見直しは勿論ですが、「私の地域では高齢者が多いので、手助けをしたい」というものが目立ちます。

年齢に関わりなく、元気な人が助けが必要な人を支えることができれば良いのですが、前提となる社会の移ろいや有り様も踏まえた共助の議論が必要であると感じます。